

●投資信託の通貨(国)別資産状況

国名	2006年12月末			2001年12月末		
	株式	債券	純資産	株式	債券	純資産
アメリカ	20,959	66,143	110,680	6,275	15,312	22,568
カナダ	545	11,521	13,268	79	355	444
オーストラリア	1,941	20,956	29,483	163	116	298
イギリス	3,762	11,256	15,777	865	1,058	1,977
スイス	771	224	1,039	225	6	239
日本	3	0	69	0	0	73
香港	10,395	24	10,796	1,444	0	1,512
スウェーデン	399	2,580	3,061	75	249	342
シンガポール	1,119	207	2,003	144	0	147
マレーシア	264	121	389	40	0	41
ニュージーランド	115	5,036	5,426	10	30	41
デンマーク	201	3,747	3,991	34	173	212
タイ	321	20	345	116	0	118
ノルウェー	233	2,116	2,420	12	16	30
フィリピン	51	50	103	8	0	8
インドネシア	184	94	281	8	0	9
メキシコ	37	383	413	13	22	35
アルゼンチン	0	4	4	0	0	0
ブラジル	648	139	801	6	0	7
チリ	8	0	8	0	0	0
チェコ	133	164	303	4	0	4
ハンガリー	147	495	651	4	0	14
エジプト	22	15	38	0	0	0
インド	3,895	0	4,045	5	0	6
イスラエル	6	15	22	0	0	0
韓国	1,180	34	1,236	221	0	225

※公募証券投資の純資産総額はそれぞれ、68兆5276億円(2006年12月末)、45兆2807億円(2001年12月末)。
 ※外貨資産比率はそれぞれ、40.2%(2006年12月末)、8.3%(2001年12月末)。

単位: 億円 (¥100million)

国名	2006年12月末			2001年12月末		
	株式	債券	純資産	株式	債券	純資産
モロッコ	0	0	4	0	0	0
ペルー	0	6	6	2	0	2
ポーランド	198	1,263	1,491	4	32	40
南アフリカ	404	370	779	73	50	127
台湾	1,500	8	1,554	254	0	275
トルコ	250	51	307	15	0	16
スロバキア	0	16	17	0	0	0
スロベニア	1	0	1	0	0	0
中国	641	53	705	0	0	0
ユーロ	5,535	54,240	66,698	1,314	7,295	8,972
ロシア	0	18	19	0	0	0
合計	55,881	181,459	277,316	11,412	24,722	37,779

ユーロ内訳	
ドイツ	896 11,991
オランダ	672 1,508
フランス	1,461 11,695
イタリア	975 9,619
フィンランド	231 275
ベルギー	167 7,022
スペイン	464 9,489
オーストリア	135 499
ルクセンブルグ	126 218
ポルトガル	15 229
アイルランド	169 141
ギリシャ	185 585
その他ユーロ	34 955

「絵本」『絵入りの教科書』。17世紀当時の世界観に基づくさまざまな事物を素朴な木版画とやさしい文章でときあかす。教育史、思想史における不朽の古典」という口上が記されている。

外貨建て資産のシェアが急速に高まっている

改めて振り返ってみると、銀行など金融機関による国債など公債の窓口販売が始まったのが昭和

「世」界中の多くの通貨の株式、債券、REITに分散するファンドだと言っても、為替リスクが心配だよね」「だってこれは米ドルだけに投資する変額年金保険でしょ。これじゃ通貨分散にはならないわね」——こうした問いに対して、読者諸兄はどのように応じられるか?

あるいは「米国では短期金利より長期金利のほうが低いつて聞いたけどなぜなの?」「なぜ豪州やNZでは金利は高いの?」について、「ああ、なるほどね」と質問を投げかけた相手を納得させるだけの説明をすることが出来るか? さらに「債券ではなぜ利回りが上がれば価格は下がるの?」「このファンドは日本の高配当利回り株に投資するっていうのが売り文句だけど、日本の上場株式の平均配当利回りってどの程度?」に対してどう応じられるか?

私は日常的に多くの銀行など金融関係者と接する機会が多い。私の私見のところでは、金融機関職員を対象に試験をしてみた場合、おそらく平均的には20点くらい

いではないか...。知識を実務で使うには「話せる」ことが重要だ

さて、本連載の狙いは表題どおり、マーケット一般についての「リテラシー」を高めることにある。「リテラシー」とは一般に「読み書き能力」とされる。あるいは、昔の寺子屋ならびに藩校で町人、武士の子弟が習ったのは「読み書きそろばん」だが、私はこれにぜひ「話す」と付け加えたいと思う。

多くの場合、私たちが習ったことは、話されることによつてはじめて意味を持つ。「理解した。分かった。でもそのことが表現できない」では実務には使えない。実務に使えない知識、知恵は、多くの場合「あつてもなくてもどちらでもいいようなもの」である。

この連載では、物事を解き明かすだけではなく、それが分かればどのようなコミュニケーションが可能になるかについても適宜、述べていきたいと思う。

ところで、このリテラシーについて、担当編集者が調べてくれた。古くは、チェコスロバキア(ボヘミア)の教育思想家、宗教指導者であったコメニウスの「世界図絵」(1658年)がリテラシー習得のための教科書第一号だと目されているらしい。現在、平凡社から「Heibonsha Library」シリーズの1冊として出版されている。

角川総一の

マーケット・リテラシー
 金融市場を読む、解く、話す力を養う
 File.001

編集者が送ってくれた画像ファイルを見ると、表紙には「世界で始めて出版された、子供のための

58年(1983年)4月。今から24年前のことである。さらに1998年12月からは、投資信託の窓口販売がスタートした。これから数えてもすでに9年を経過した。すでに現在では、金融機関の店頭では債券、外貨預金、投資信託、変額年金保険など、市場性商品がラッシュ状態と化している。

であれば、金融で飯を食おうとする人は、これらの金融商品の資産価値の変動に直接影響を及ぼすマーケットに対するアプローチの基本は、わかまえておくべきだと思ふ。ここで言う「マーケット」とは、短期金融市場、債券市場(中長期金利)、為替市場、株式市場、商品先物市場などを指す。

しかも、ごく最近に至り、銀行などの店頭で日常的に扱われる商品の、投資対象として市場が急拡大してきている。一言で言うと「一気にワールドワイド化してきた」のだ。

因は、「何でもあり」の最右翼の商品と言つていい、投資信託が組み入れている外貨建て資産の規

金融機関窓口における市場性商品ラッシュと外貨建て資産の急増で
ワールドワイド化するマーケットを読み、解き、話すリテラシーが重要に
 MARKET LITERACY